
感動クラブへようこそ！

ほしの すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感動クラブへようこそ！

【Nコード】

N0082I

【作者名】

ほしの すばる

【あらすじ】

喜屋武慧はいじめが原因で友達を作ろうとはしなかった。そんな慧に校内一の美少女、朝霞由姫から「感動クラブに入りませんか？友達をたくさん作りましょう」と声を掛けられる。慇懃無礼な態度に腹を立てた慧は断り続けたが、ついには由姫と極道執事の萬谷弾に拉致されてしまう。

プロローグ（前書き）

楽しんで読んでいただければ幸いです。

ブローグ

高校に入学して一ヶ月くらい経った、とある月曜日の放課後。

下校中の僕に彼女が話しかけてきた。

見るものすべてを吸い込んでしまいそうな大きな双眸。

つんと高く筋の通った鼻。

ほんのりさくらんぼ色をした形の良い唇。

極上な三点セットが小さな顔の中にバランス良くおさまっていた。腰まで伸びた漆黒のストレートヘアが、初夏の風に少しだけ揺れる。身長は僕より少し高いから一六五センチくらいといったところだろうか。セーラー服の上からでも彼女のスタイルの良さは見てとれる。

美少女の中でもかなり上位ランクだ。おそらく世の中の男性の九七パーセントは、彼女を見て心をときめかすことだろう。残念ながら僕は残り三パーセントの男性に属するようだ。彼女を見ても心はときめかない。だからといって、男性に心をときめかすタイプでもない^{きよたけさとし}と断言しておく。

「喜屋武慧さん、ですよね？ 私、この一ヶ月間あなたのことをずっと見てきました」

彼女は僕の返事を確認する前に言葉を続けた。もし僕が喜屋武慧じゃなかったらどうするつもりだったのだろう。本人だから問題はないけど。

彼女は頬をリンゴのように赤く染めている。

「あの大変失礼なことをお聞きしますが、あなたには友達がいらっ

「しゃいませんよね？」

「……………」

「感動クラブに入りませんか？ 友達をたくさん作りましょう」

この言葉で『高原で白い子犬と戯れる清楚なお嬢様』のイメージから一転、『慇懃無礼なお嬢様』というレッテルを彼女に貼り付けた。

確かに僕に友達がいないのは間違いない。だが、友達がいないのではなくて作らないだけだ。僕のポリシーだ。それを他人、しかも初対面の人間に言われる筋合いはない。

最悪の第一印象だ。

「断わります」

僕はすれ落ちそんな眼鏡を人差し指で押し上げて短く即答すると、彼女の前を通り過ぎていった。

後で知ったのだが、彼女の名前は朝霞由姫。あさかゆき

僕と同じ高校に通う二年生。登下校はいつもリムジンというお金持ちのお嬢様らしい。

そんなお嬢様なら人のプライバシーに乗馬で踏み込んできて馬糞まみれにするようなことを平気で言うのかもしれない。

だいたい金持ちのお嬢様がこんなレベルの低い高校に通っていること自体がありえない。お嬢様はお嬢様に見合った身分相応の私立高校に通っていいんだ。どんな理由があるか知らないけど迷惑な話だ。

まあそんな迷惑なお嬢様とはもう二度と言葉を交わすことはないだろう。

だけど、そんな僕の考えは甘かった。

1(1)

五月一三日金曜日。

朝霞由姫はあの日から毎日下校時に校門前で僕を待ち伏せしていた。そして、同じ言葉をかけてくる。

「感動クラブに入りませんか？」

と、呪文のように毎日。

僕は無視することで朝霞由姫の勧誘を断り続けていた。

だいたいその『感動クラブ』というネーミングからして胡散臭い。しかも、うちの高校にはそんなクラブは存在しない。一般のサークルかもしれないけど、どちらにしても僕はクラブ活動などするつもりはない。

朝霞由姫はなぜしつこく僕だけを勧誘してくるのだろうか。いや、勧誘しているのは僕だけというのは傲慢だ。もしかしたら校内の男子生徒は僕を除いて全員感動クラブなどというよくわからないクラブに入っているのかもしれない。

下校中の男子生徒からの羨望&嫉妬ビームが僕に突き刺さる。これは朝霞由姫の勧誘を断り続けているせいだろうか。そりゃ面白くないのは当然か。普通の、いや空気のような目立たない存在の僕に、校内一の美少女が毎日待ち伏せして話しかけてくるのだから。気を引くためにわざと断っているのかと思われているかもしれない。

迷惑な話だ。男子生徒の反感を買っていじめの対象になるのはもう懲り懲りだ。わざわざ小一時間かけて電車通学しなければならぬ高校に通っている意味がなくなる。もっとも世間体のためだけに両親から無理矢理通わされている高校だから、通えなくなっても僕的には困りはしないけど。いや、待てよ。公立高校へ通うことがエリート意識の高い両親への唯一の反抗だから、通えなくなるのは困るか。

だからといって、朝霞由姫の申し出を受け入れるわけにもいかない。

「喜屋武くん、あの」

話しかけてくる朝霞由姫を無視して、僕は校門を通り抜けようとする。

と、いきなり眼前に黒い壁が立ちはだかった。

それは黒いスーツを長身に包んだ、体躯の良い男だった。

オールバックの黒髪。

ゴールドフレームの細めなサングラス。

左頬には縦一文字の傷跡。

高級そうなクロコダイルの靴。

年の頃は二〇代後半といったところだろうか。頭のとっぺんからつま先まで、どこをどう見てもヤのつく業界の人としか思えない。

男がサングラス越しに僕を見下ろしているのがわかった。おそらく一般人の九七パーセントは男の容姿に畏怖の念を抱くだろう。そして、今回は僕もその九七パーセントの仲間入りだ。僕の膝はガクガクと震えていた。

こういう人間とは関わらない方が賢明である。

僕は男を視界から削除して、家路を急ぐことにした。

「ちよつと待てよ」

すれ違いざま、僕は制服の詰襟をつかまれて引き戻される。

うそだろう？ 僕はあんな業界に知り合いはいないぞ。

僕の体は首根っこをつかまれたノラ猫の如く、宙に浮いていた。

男が空いた左手でサングラスを外す。切れ長の釣り上った双眸から殺気に満ちたビームが放たれていた。まるで獲物を狙うヒットマンのようだ。

「おい、お嬢が話しかけてんのにシカトはねえだろう！」

状況から考えて、『お嬢』というのはやはり朝霞由姫のことを指しているのだろう。

お嬢様はお嬢様でもあつちの業界の人間だったとは思ひもしなか

った。

言うことを聞かない僕を暴力で脅すつもりなのか。もしかして『感動クラブ』ではなく『極道クラブ』の聞き間違いだったのだろうか。いや、いくらなんでも『感』と『極』は聞き間違えないだろう。

今はそんなことを考えている場合ではない。この状況の打開策を考えねば。しかし、恐怖で思考回路はストライキ中だ。

「ダメです、萬谷さん。^{マンダヤ}喜屋武くんを放してあげてください」

朝霞由姫に萬谷と呼ばれた男は右腕を振り下ろす。僕の靴底が地面を感知する。だが、詰襟はつかまれたままだ。

萬谷はサングラスをかける。

「何言ってやがんだ。お前がトロトロしてっからオレが手伝ってやつてんだろうが」

「私、がんばりますから」

「もう時間がねえことはお前だってわかってんだろう」

「それはわかっています。でも、やはりここは本人の意思を尊重してあげた方が」

「そんなのん気なこと言ってから、いつまでたっても連れて行けねえんだろうが。こういう奴はな」

詰襟をつかまれたままの僕の体は再び宙に浮いた。萬谷はそのまま歩き出す。

先刻まで僕に羨望&嫉妬ビームを浴びせていた男子生徒はいつの間にか姿をくらませていた。そりゃそうだ。誰だって巻き添えは食らいたくない。自分が一番大事だ。

一体僕をどうするつもりなんだ？

1 (2)

萬谷が向かう先には、一台の黒い車が停まっていた。クラシク
なアメリカ車だ。

萬谷は観音開きの後部ドアを開けると、

「こうしまえばいいんだよ」

そう叫んで、僕を後部座席に押し込んだ。

僕は革張りの白いシートに顔をうずめた。革独特の匂いが鼻についた。

「喜屋武くん、大丈夫ですか？」

反対側の後部ドアから朝霞由姫が心配そうに顔を覗かせた。

ん？ 彼女の顔がぼやけて見えるのは気のせいかな？

「ごめんなさい。萬谷さんに悪気はないんです。私のためにやって
くれていることで」

朝霞由姫が後部座席に乗り込んでくる。

ぱきつ。

同時に、軽い擬音が聞こえた。

「あ……」

朝霞由姫が体重をかけた左手の下には、プラスチックフレームの
テンプルの部分が折れた僕の眼鏡があった。たぶん車に押し込まれ
た時の衝撃で外れたのだろう。

ぼやけてはいるが、朝霞由姫の表情が強張っていくのがわかった。

「ごめんなさい！ 弁償します！」

「いいですよ。替えの眼鏡がありますから」

弁償してもらう方が高くつきそうな気がしたので、僕は即断った。
そして、帰るなら今がチャンスだ。

僕は座席に座りなると、カバンの中から眼鏡を取り出した。中学時代にかけていた眼鏡だから、多少度数が合わないけど。

「では、僕はここで失礼させ」

車が発進していることに気付いて、僕は言葉を切った。

しかも、高校がもう見えなくなっている。エンジン音に気付かないくらい僕は動転していたのだろう。

やばい、もう逃げるチャンスがない。

今の心境を例えるならば、ありきたりだがドナドナの子牛だ。

「改めて自己紹介させてくださいね。私は朝霞由姫。喜屋武くんと同じ高校に通う二年生です」

僕のブルーな気持ちに気付くはずもなく、朝霞由姫はのん気に自己紹介を始め出す。

「車を運転しているのは、萬谷弾^{だん}さん。私のお手伝いをいろいろとしてもらっています」

「執事だ。よろしくな」

萬谷はルームミラー越しにこちらを見た。

執事？ 執事ってこんなにも態度が大きくて主人を敬わない職種だったか？ 若頭の間違いじゃないだろうか。

「こんな強引な形を取ってしまったってごめんなさい。でも、どうしてもあなたに会ってほしい人がいて」

「クラブの勧誘じゃなかったんですか？」

「それもありますけど、優先順位がありまして……」

朝霞由姫は困惑の表情を浮かべる。

僕を人に会わせるのが優先の割には、初対面の時にそんなこと一言も言わなかった。

「こいつはトロクせえから、肝心なことをうまく人に伝えることができるんだよ」

萬谷がハンドルを左に切ると、タイヤが軋んだ音を立てる。僕の体が右に揺れる。古そうな車なのに、こんなにスピードを出して大丈夫なのか。

「この車はケネディが殺された時に乗ってた車だからな、古いのは当たり前だ」

萬谷が今度はハンドルを右に切りながら答える。僕の体が左に揺れる。

第三五代アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディ。一九六三年一月二二日に銃撃によって暗殺された。当時乗っていたリムジンが一九六一年式リンカーン・コンチネンタルだった。でも、それってオープントップだと思ったけど。

「翌年にクローズドトップ使用に交換してんだよ。その後、表向きはリンドン・B・ジョンソンの公用車ってことになっちまつてるが、貰い手がねえってんでオレが超破格で買い取ってやったんだよ」

萬谷はどこか得意げに言う。

リンドン・B・ジョンソンというのは、ケネディ暗殺後に政権を引き継いだ第三六代アメリカ合衆国大統領だ。

あれ？

ふと疑問に思った。僕は胸中で思っただけなのに、どうして萬谷との会話が成立するんだ？

まさか僕の心を読んでいるなんてことはないだろうな。

「そりゃよ」

リンカーン・コンチネンタルが赤信号で停まると、萬谷は肩越しに僕を振り向いた。僕は戦慄した。

「オレが執事だからだよ」

信号が青に変わると、リンカーン・コンチネンタルが急発進する。しかし、萬谷は顔をこちらに向けたままだ。

「よ、萬谷さん、ちゃんと前を向いて運転してください！」

「わかってんよ。いちいちオレに命令するな」

萬谷は軽く舌打ちすると、前へ向き直った。

「驚かせてしまっでごめんなさい。萬谷さんは人の心が読めたりしてちょっと変わっていますけど、気にしないでくださいね」

ちよっとなんてレベルじゃないだろう。気にするなって言う方が

無理だ。でも、これ以上僕の心の中を読まれるのは、それこそプラ
イバシーの侵害だ。

僕は無心を心がけることに集中した。

何も考えない。

何も考えない。

僕は何も考えない。

「そうそう。今は何も考えなきゃいいんだよ」

小声で呟く萬谷の声が聞こえた。

2 (1)

「着いたぞ」

萬谷の声で僕はハッと我に戻った。どうやら僕は本当に無心になつていたみたいだ。

リンカーン・コンチネンタルが停まったのは、二階建ての普通の民家の前だった。周りを見ればどこかの住宅街であることがうかがえた。

腕時計を見てみると、一八時前だった。高校から小一時間ほど車で走った場所ということか。僕はつきりごつい門構えの屋敷が待ち構えているばかりと思つていた。

「お前らさつさと降りねえか」

僕は不本意ながら萬谷に言われるがままリンカーン・コンチネンタルから降りた。朝霞由姫は僕とは反対側のドアから降りる。って、普通は執事が主人のためにドアを開けるものじゃないのか。

「オレは忙しいんだよ。自分でやれることは自分ですんのがオレらのポリシーだ」

どうやら萬谷がまた僕の心を読んだらしい。

「オレは行くところがあつからよ。お嬢、わかつてんな？」

「はい、がんばります！」

何をがんばるのかは知らないけど、朝霞由姫は力強く応えて走り去つていくリンカーン・コンチネンタルを見送った。

「では、行きましょうか」

僕は朝霞由姫に促されて、『かつらぎ榎木』という表札のかかった玄関先に立った。

朝霞由姫がインターホンを押す。

と同時に、玄関のドアが勢い良く開いた。まるでドアの向こうでインターホンが鳴るのを待っていたかのようなタイミングだ。

「由姫姉、おかえりっ！」

元気の良い声の主はそう言っただけで僕の体に抱きついてきた。明らかに人違いをしている。その証拠に声の主は顔を上げると、表情を硬直させていた。まだあどけなさが顔に残るショートヘアの女の子だった。

「何なんだよ、お前はーっ！」

女の子は力いっぱい僕を突き飛ばした。無防備だった僕の体は尻もちをつく形で後ろへ吹き飛んだ。大げさな言い方かもしれないけど、僕にはそう思えた。

「喜屋武くん、大丈夫ですか？」

朝霞由姫が慌てて駆け寄ってくる。

ばきっ。

またしても不吉な擬音が聞こえてきた。

顔面蒼白の朝霞由姫はまるで金縛りにでもあったかのようにその場から動けずにいた。それもそのはず。朝霞由姫の右足の下には、メタルフレームのリムの部分が歪み、レンズが割れた僕の眼鏡があったからだ。

しかし、突き飛ばされたくらいで簡単に眼鏡が外れるとは。古い眼鏡だったから蝶番が緩んでいたのかもしれない。

「ごめんなさいごめんなさい！眼鏡は二個とも弁償しますから」

朝霞由姫は壊れた眼鏡を握りしめて土下座していた。

「いいですよ。まだ替えの眼鏡がありますから」

僕は弁償を丁重にお断りして、カバンの中から眼鏡を取り出した。小学生時代に使っていた眼鏡だから度数は全然合わないけど、ないよりはマシだ。

二度あることは三度ある、になると困るので、念のため蝶番を締めしておくことにしよう。

僕はペンケースの中から精密ドライバーを取り出して、蝶番の緩みを調整する。

「すごいです。喜屋武くんのカバンの中にはいろんなものが入っているんですね。私、感動しました」

朝霞由姫が僕のカバンの中を興味津々の眼差しで見つめてくる。こんなことでいちいち感動するなんて変な人だな。

「誰、こいつ？」

僕を突き飛ばした女の子が朝霞由姫の後ろから見下ろしていた。プリント柄Tシャツとショートパンツという子供らしい軽装とは裏腹に、その視線は鋭くて冷たいものだった。

僕に会ってほしい人って、この子って言うんじゃないだろうな。

「凜ちゃん、紹介する前に先に喜屋武くんに謝りなさい。ほら、ここに座って」

朝霞由姫は自分が正座している右隣を示した。そこは土の上だった。天然ボケしたお嬢様かと思っただけであつて仁義を大切にしているんだな。さすがは極道の家系だけあつて仁義を大切にしているみたいだ。

凜と呼ばれた女の子は、朝霞由姫に従って渋々その場に正座した。
「ごめん、なさい」

凜は短く謝罪した。さすがの僕もそこまでやられて許さないわけにはいかない。

「別に大したことじゃないからいいよ」

僕が立ち上がると、朝霞由姫と凜も立ち上がる。二人は膝についた土を払い落す。

「紹介が遅れましたが、この子は私のお友達で前園凜ちゃんまえそのりん中学二年生です」

中学二年生だったとは。童顔だな。

「お前、今アタシのこと童顔だなんて思っただろう？」

凜の言葉に僕は総毛立った。まさか凜も僕の心が読めるのか？

「初対面の奴は決まってそう思うんだ。だから、お前もそう思ったに違いない」

凜は小さな唇を尖がらせた。

なんだ、統計論で言っているだけか。驚かせやがって。まあ確かに僕を初めとする九七パーセントの人間がそう思うだろう。

どうやら凜は自分が童顔であることにコンプレックスを持っているようだ。生意気なこと言ってもやっぱり思春期の女の子なんだな。

「大丈夫ですよ。凜ちゃんだってもう二、三年すればステキな淑女^{レディ}になれますよ」

朝霞由姫は凜の頭をなでながら慰めの言葉をかける。

たぶんそれは無理だろうと僕は思った。まずはその言葉使いと態度を改めない限りは。

しかし、凜は朝霞由姫の言った言葉を鵲呑みにして納得の笑みを浮かべていた。まあ本人が納得しているならそれでいいけど。

「あ、凜ちゃん。この人は喜屋武慧くんです」

「お前がねえ」

凜は品定めするかのようには僕を見ると、低い鼻をふんと鳴らした。年下のくせに生意気な女だ。どうやら凜は朝霞由姫に好意を持っているみたいだ。だから、朝霞由姫が連れてきた僕という存在が気に入らないのだろう。結果論として、凜は僕に会ってほしい人ではないということになる。

「由姫姉、雛子^{ひなこ}先生が待ってるから早く中に入ろうよ」

凜は朝霞由姫の右手を引っ張って家の中に入ろうとする。

「喜屋武くんもどうぞ」

朝霞由姫が残った左手で僕の右手を引っ張る。やわらかくて温かな手だった。

2（2）

玄関に通された僕を待っていたのは、エプロン姿の一人の女性だった。

肩にかかる茶色の髪。年の頃は二〇代前半といった感じで、厚みのある唇がとても印象的だった。何だか新婚ほやほやの新妻って感じだ。

女性は僕に向かって駆け寄ってくると、有無も言わず自分の胸へ僕を抱き寄せた。僕の顔は豊満な女性の胸に押し付けられる形となった。

今かけている眼鏡がジュニア用フレームの超弾性合金じゃなかったら、間違いなく他の眼鏡と同じ結末を迎えていただろう。

「キミが来るのを待っていたのよ、喜屋武慧くん！」

僕の名前を呼んだのだから、凜の時のような人違いではなさそうだ。では、僕に会ってほしい人というのはこの女性のことだろうか。にしても、こんなに強く抱きしめられたら息ができない。世の中の男性の九七パーセントはこのまま死んでもかまわないと思うかもしれないが、僕としてはできればこういう死に方は避けたい。

「雛子先生、落ち着いてください！ 喜屋武くんが圧迫死してしまいます」

「あ、ごめんごめん」

朝霞由姫の言葉で、大袈裟かもしれないけど僕は九死に一生を得た。僕は肺の中に空気を送り込んだ。

「喜屋武くん、この人は榎木雛子さん。この家の持ち主でグループホームの責任者です」

グループホームとは、比較的少人数で生活を共にする児童養護施設のことだ。この家には、親がいないか親の事情でいっしょに暮らすことができない子供たちがいるということになる。つまり、この家にいる凜はその子供の中に入るんだろうな。しかし、僕は凜に同

情する気にはなれなかった。両親がいるからといって幸せとは限らないんだ。

朝霞由姫はここで暮らす子供ではないだろう。あんな極道執事がいてリムジンで毎日立送迎してもらっている人間にはまず縁のない世界だ。お嬢様の暇つぶしにボランティアでもしているといったところだろう。お気楽なもんだな。

「よろしくね、慧くん。あ、スリーサイズは教えてあげてもいいけど、年齢は聞かないでね」

「もう雛子先生、喜屋武くんをからかわないでください」

「由姫は真面目すぎるのよ。こういう冗談くらい言えないと、子供は懐いてくれないわよ」

雛子さんって、明朗快活なんだな。でも、これくらいの人じゃないと、自分の子供でもないに複数の子供の面倒なんて見てられないよな。

「大したおもてなしもできないけど、自分の家だと思ってくつろいでちょうだいね」

「はあ」

僕は生返事することしかできなかった。自分の家でくつろいだ記憶がないからだ。

勉強しなさいとしか言わない母親。仕事が忙しいのを理由にして僕が起きている時間に帰ってこない父親。小中学校で僕がいじめられていたことに気付きもなかった。だから、僕は母が推薦する私立高校の受験で白紙回答を出して不合格になってやった。少しでも僕の異変に気付いてほしかったからだ。でも、両親は世間体だけをすごく気にする人たちだったので、とにかくどこでもいいから僕を高校に入学させようと躍起になったただだった。最終的には定員割れして再募集していた公立高校しか残ってなかったわけだけだ。

それから母は近所の人と会うことを避けるため、どこかへ働きに行くようになった。父は相変わらずだ。

僕は家に戻っても自室にこもったままで、お腹が空けばキッチン

に行つて買い置きしてあるインスタントラーメンを食べる。そんな繰り返しの毎日だった。

あんな両親ならいない方がマシだ。

「凜、夕食の手伝いをしてちょうだい」

「雛子先生、今日のメニューは？ アタシ、もうお腹ペコペコだよ」
「ふふ」

雛子さんはふくみのある笑みを浮かべて誇らしげに胸を張った。

「今夜はみんな大好きハンバーグよ。しかも、とろけるチーズ付」
「やりっ！」

凜はガッツポーズを取った。この辺がまだまだ子供なんだな。

「私もお手伝いします」

「由姫はいいのよ、由姫は」

雛子さんの笑顔が少しひきつっていた。その表情から朝霞由姫は料理に不向きな人間であることが理解できた。今までの言動から考えて、砂糖と塩を間違えるという定番的なミスを犯しそうだからな
「由姫は慧くんといっしょにあの子を呼んできてちょうだい」
「はい、わかりました」

朝霞由姫は雛子さんに厄介払いされたことに気付くこともなく、笑顔で応対した。僕もこれくらい鈍感な人間だったら多少は人生を楽に生きられたのかもしれない。そう思った。

「では、参りましょうか」

僕はポジティブな朝霞由姫に促されて、二階へと上がった。

2 (3)

二階に上がると、東側に二つ、突き当りに一つの計三つの部屋があった。西側にある窓から射す夕日が白い壁紙をオレンジ色に染めていた。

朝霞由姫が手前にある部屋のドアをノックする。が、返事はない。「由姫です。入りますよ」

朝霞由姫は返事がなかったにもかかわらず、ドアを開けた。まだ十八時過ぎだというのに、室内は薄暗かった。閉め切ったカーテンが太陽の光を遮っているせいだ。しかも、部屋も閉め切っているのだらう。何やら悪臭が充満している。生温かくてじめじめと陰気臭い部屋だった。

僕はその光景に不快感を覚えた。それは当然だった。この部屋は僕の部屋と酷似していた。すべてのものを遮断している僕の心そのもののように思えた。近親憎悪ってやつかもしれない。

壁際に位置するシングルベッドの上に誰かが座っていた。この部屋の住人だらう。上下ジャージ姿の人影は壁にもたれかかり、天井を見上げていた。

朝霞由姫は部屋に入ると、人影に歩み寄っていく。僕は中に入ることを躊躇した。

「千依里さん、喜屋武くんが来てくれましたよ」
ちより

朝霞由姫の言葉に、人影はあからさまに体をビクつかせていた。

千依里？ どこかで聞いた名前のような気がしたけど、僕はすぐに思い出せずにいた。

「ホントに喜屋武が来てくれたのか？」

人影がシングルベッドから降りると、部屋の中心へと動き出す。

西日が人影の姿を照らしだす。

そばかすだらけの赤みを帯びた頬。

ポニーテールが金色に輝いていた。

逆光でまぶしいのか細められた双眸は困惑していた。

僕の左脳が『そばかす＋千依里』小学五年生の時に僕をいじめていた角南千依里』という数式を完成させた。

封印していた記憶が怒涛の如く蘇ってくる。

小学五年生の時のクラス替えで角南千依里とは初めて同じクラスになった。これがケチのつき始めだったのかもしれない。当時の僕は今と同様空気のような目立たない存在ではあったが、いじめられっ子ではなかった。ところが、角南は理由もなくいきなり僕に暴力をふるってきた。それを面白がったクラスメイトたちがいつしよになつて僕をいじめ始めた。いじめがエスカレートする一方で、いじめの当事者である角南は夏休みの間に転校してしまっていた。しかし、一度始まったいじめは止まることはなく、小学校を卒業するまで続き、いじめられっ子のレッテルを貼られたまま中学校に入学した。先生に相談したことはあったが、あやふやなことばかり言うて取り成してくれなかった。死んでしまおうかと思ったこともあった。だけど、死ねなかった。僕には死ぬ勇気すらなかったのだ。

みじめだった。

僕は自分の運命を狂わせた角南千依里を何度呪ったことだろうか。今その張本人が僕の目の前にいる。

言いたいことは山ほどあったけど、怒りで言葉が出てこない。ただ強く握り締めた拳を震わせるだけだった。

沈黙が続いた。数秒間だったかもしれないけど、僕には数時間のようによく感じた。

「由姫姉、ハンバーグできたぞ！ 早く食べようぜ！」

二階へ上がってきた凜が重苦しい空気をあつさりと吹き飛ばした。「そうですね。まずは食事にしましょう。人間お腹が空くとよくないことばかり考えてしまいますから」

僕は朝霞由姫に背中を押されて一階へ下りた。

3 (1)

僕の視界に角南がいなければ、数年ぶりの温かい手作り料理を堪能できたに違いない。それほど雛子さんが作ってくれたハンバーグは美味しかった。

食事を終えた角南は逃げるようにして自室へ戻っていった。きつと角南も僕がいなければ美味しく食べることができただろう。

「千依里の奴、手伝いもしねえで食っただけ食ってさっさと部屋に戻りやがってさ」

雛子さんといっしょにキッチンで洗い物をしている凧は大きな声で愚痴を言っていた。

「千依里の傷は深いだよ。だから、もうちょっと好きにさせてあげてちょうだい」

「雛子先生がそんな甘いこと言ってるから増長すんだよ。あーいう奴はガツンと一発言ってやった方がいいんだよ」

「みんながみんな凧みたいに強くはなれないのよ。でも、先生助かるわ。凧がお手伝いしてくれるから」

雛子さんのほめ言葉に、凧の皿洗いのスピードが二〇パーセントアップした。どうやら凧はおだてに弱いらしい。

朝霞由姫はというとキッチンから閉め出されたにもかかわらず、レクリエーションルームから雛子さんと凧の姿を微笑ましく見つめていた。

レクリエーションルームには、テレビ、DVDプレイヤー、童話から文学書まで詰まった本棚、円卓とイスがあった。普通の家ならばリビングルーム兼書斎といったところか。

僕はイスに腰掛けて、出された食後のコーヒーを飲んでいた。

「僕に会ってほしい人っていうのは、角南千依里のことだったんですか？」

「はい。千依里さんがどうしてもあなたに会いたいと」

朝霞由姫は事情を知らないのか、あつさりと認めた。

「僕は会いたくなかった」

「あなたをいじめていた人だからですか？」

「！」

僕は言葉を詰まらせた。朝霞由姫はすべてを知っていて、僕と角南を会わせたというのか。

「喜屋武くんはここがどういう所か覚えていますよね？」

「グループホームでしょう」

言った後に気付いた。角南がここにいるということは、凜同様両親がいないか、何か事情があつていつしよに暮らせないつてことだ。「千依里さんのご両親は千依里さんが小学五年生の時に離婚されたそうです。千依里さんはお父さんに引き取られました、面倒を見ることがむずかしいといって、ここに預けられました」

「どうして母親が引き取らなかったんですか？」

「千依里さんのお母さんは暴力をふるう人でしたので、心配したお父さんが引き取ったそうです」

そんなの世間じゃよくあることだ。同情に値しない。

「だからといって、僕は角南を許す気にはなれません」

「そうですね。人を許すというのは寛容な精神が必要です。だからこそ、千依里さんとちゃんと話し合ってほしいのです」

「みんな同じことを言っんですね。いじめられている方が悪いみたい」

「いえ、私はそういうことを言っているのではなく、誰もが幸せになる権利があると思うのです。だから」

「幸せしか知らない人が言いそうな自己満足的発想ですね」

そう言った瞬間、僕の後頭部を激痛が襲った。

3（2）

振り向くと、お玉を持った凜が憤怒の形相で立っていた。激痛の原因は凜が持つているお玉による殴打だ。

「お前一人だけが不幸だなんて思ってたんじゃないぞ！　ちよつといじめられたくらいで陰険になりやがって」

その口ぶりから凜も角南が僕をいじめていたことを知っていると確信する。

みんなが角南の肩ばかり持っているような気がして、僕は苛立ちを感じた。

「僕の気持ちがお前らにわかるもんか！」

「ああ、わからないよ。いじけて自分から何もしようとしない根性なしの気持ちなんか」

「凜ちゃん」

声がだんだんと大きくなっていく僕と凜の間に、朝霞由姫が入ってきた。凜は口を閉じる。

「ここは大丈夫だから。凜ちゃんは雛子先生のお手伝いを続けていて」

「でも、由姫姉」

「ね、凜ちゃん」

「わかった。けど、こいつがまたなめたこと言ったらすぐにアタシを呼ぶんだぞ」

「ありがとう、凜ちゃん」

凜は納得のいかない表情でキッチンに戻っていった。これでは僕は完全に悪役じゃないか。

凜がキッチンで皿洗いを再開したのを確認して、朝霞由姫が再び口を開いた。

「凜ちゃんのお父さんは人を殺しました。お母さんはそれが原因で心を病んでしまい自ら命を絶ちました。凜ちゃんはお母さんを失い、

殺人者の娘として世間から迫害されてきました。けど、凜ちゃんは負けずに戦い続けてきました。だから、喜屋武くんにあんなことを言ってしまったんだと思います」

「僕にみんなの不幸自慢を聞かせるためにここに連れてきたんですか？」

「違います、私は喜屋武くんにも前向きに生きてほしいと思ったんです」

「偽善者の道楽に付き合わされるのはまっぴらごめんです！」
いつになく僕は大声で叫んでいた。

朝霞由姫の言うことが正しいのはわかっていた。だけど、それを面と向かって指摘されたのがショックでたまらなかった。

僕は朝霞由姫の顔を見ることができず、その場から逃げ去った。玄関を出ると、闇夜の中に黒塗りのリンカーン・コンチネンタルが停まっていた。

僕はリンカーン・コンチネンタルの助手席に座っていた。もちろん運転席にいるのは極道執事こと萬谷弾である。

玄関前で萬谷の姿を見た時、僕は無理矢理檜木家に連れ戻されると思っていた。だけど、萬谷は何も言わず助手席側のドアを開けただけだった。その無言の威圧は恐怖を倍増させ、僕には助手席に座るという選択肢しか残されていなかった。

そして、萬谷はリンカーン・コンチネンタルを発進させるわけでもなく、運転席に座ってタバコを吹かしているだけだった。情けない話だが、僕はガクガクと震える膝を両手で押さえつけるのに必死になっていた。

「その様子だと、お嬢はお前に真意をうまく伝えられなかったみたいだな」

萬谷がタバコの煙を僕に向かって吐き出した。思わず咳きこむ。

こんなものを吸いたがる大人の心理が理解できなかった。そういえば、この臭いは角南の部屋で嗅いだ臭いと似ている。薄暗くてわからなかったけど、角南は喫煙者だったのかもしれない。最低な女だ。「これのうまさがかんねえとはガキだな。たまにはタバコの本くらい親の目の前で堂々と吸ってみろ。んなこともできねえから甘ちゃんだって言われんだよ」

萬谷は僕の心をまた読んだからそんなことを言ってくるのだろう。だけど、僕が檜木家を出てきた理由とタバコとは関係ないような気がするんだけど。

「お嬢の両親はな、お嬢が生まれてすぐ交通事故で死んだ。後部座席のチャイルドシートで眠っていたお嬢一人を残してな」

何の前置きもなく、萬谷はいきなり朝霞由姫の生い立ちを語り出す。

「その後、引き取ってくれた伯父夫婦も数年後に交通事故で他界した。この時も後部座席にいたお嬢は奇跡的に助かっている。だが、それ以来親戚どもはお嬢のことを『死神』と呼んで忌み嫌い、児童養護施設へ追い払いやがった」

萬谷は運転席側の窓を開けて、今度はそちらに向けてタバコの煙を吐き出した。暗闇の中に白い霧が浮かび上がる。

「そして、一年前にその児童養護施設が火事になり、お嬢以外の人間はみな焼死した」

その話を聞けば誰だって朝霞由姫には何かがあると疑心暗鬼になるだろう。

「自分は他人を不幸にしてしまう。そう思ったお嬢は自ら命を絶とうとした。ボスの命令でお嬢を探していたオレがお嬢を見つけ出したのは、そんな時だった。初めて会った時のお嬢の目はまるで死人だった。生きることを、いやすべて拒絶する目だった」

僕は朝霞由姫の生い立ちを聞き入っていた。いつの間にか膝の震えも治まっている。

「オレはお嬢をボスに引き合わせた。ボスはお嬢に言った。お前は『死神』ではない。人一倍『生き運』が強いだけだ。これからはその『生き運』を活かせる生き方をしろ、ってな。その言葉でお嬢の目には生気が戻った」

世間知らずなお嬢様だと思っていた。のん気そうなあの表情からは、そんな過酷な人生を経験してきていたなんて想像もつかなかった。

でも、朝霞由姫の本性を見抜いて立ち直らせるなんて、さすがは極道の親分だ。経験した修羅場の数が違うんだろうな。

萬谷つてもつと怖い人かと思っていたけど、外見とは裏腹にやさしい人なのかもしれない。認識を改めないといけないかもしれない。「おい、お前……。ま、いいか」

萬谷は何かを言いかけて止めた。今の僕の心も読まれたんだろうな。気になるけど、確認する勇氣はない。

「とにかくだ。それからお嬢は不幸な人間を救ってやりてえと思うようになった。この話を聞いたからといってお前が協力しなきゃいけないことはねえ。帰りたけりや今すぐこの車から降りてとっと帰りゃいい。お前が決めることだ」

「僕が……決める」

僕は小さく呟くと、自分の意志でリンカーン・コンチネンタルから降りた。

榎木家とは逆方向に歩きだす。

「おい、お前どこ行くつもりだ？」

萬谷の呼び止める声に殺意を感じた僕の本能が、振り向くことを拒絶した。やっぱり怖い人かもしれない。

「い、家に帰ります」

僕は背を向けたまま答えた。

「お前、オレの話を聞いてなかったのか？」

「聞いていました。あなたのお嬢様は確かにつらい人生を歩んできたかもしれませんが。でも、それはそれ。僕は角南千依里を許す気にはなれませんから」

僕はゆっくりだが少しずつ歩を進めていった。

「ったく、男のくせにみみっちいこと言ってるじゃねえぞ。最近のガキは自己チューばつかで性質が悪いぜ」

萬谷の怒声が頭上から降り注いだかと思うと、僕の体は宙を浮いた。萬谷がまた僕の学生服の詰襟をつかんだのだ。

僕の体は宙吊りのまま一八〇度方向転換させられる。もちろん向かう先は、榎木家だ。

何だよ、かつこいいいこと言っておいて結局は僕に決断する権利なんか与えてくれないんじゃないか。

「オレはお嬢の執事なんだよ。お嬢に不利になるようなことするわけやねえだろう」

萬谷は僕をつかんだまま、榎木家の玄関のドアを開ける。朝霞由姫がレクリエーションルームから飛び出してくる。たぶん僕が戻っ

てきたと思っただろう。まあ間違いではないが。

「萬谷さん、何をするつもりなんですか？」

「やかましい！ お嬢はチビと風呂でも入ってる！」

呼びとめる朝霞由姫の声も聞かず、萬谷は土足のまま二階へと上がっていく。

「男なら自分でけじめつけてこい！」

僕は角南の部屋に放り投げられた。

真っ先に僕が確認したのは、眼鏡をかけているかどうかだった。どうやら今回は外れなかったみたいだ。蝶番を締め直したのが功を奏した。

角南の部屋は日も暮れたせいもあって、先刻より暗さが増していた。唯一の明かりと言えば、カーテンの隙間から洩れてくる月の光くらいだ。

僕はすぐさま部屋を出て行こうとして、ドアノブを探した。

「誰？」

角南の声がした。

「もしかして、喜屋武？」

僕は返事をせず、探しだしたドアノブから外へ出ようとした。

「ごめんなさい」

消え入りそうな小さな声が聞こえてきた。僕をいじめていた小学五年生の角南からは想像できないくらいしおらしい声だった。

僕はドアノブにかけた手を下ろした。

「今更こんなこと言っただって言い訳にしか聞こえないと思うけど。

私、喜屋武をいじめているつもりはなかったんだ」

「いじているつもりはなかった？ 確かにいじている人間がよく使う言い訳だよな」

「私、知らなかったんだ。それが当たり前のことだと思ってたから」その言葉は僕の怒りをMAXにするのは充分すぎた。

「ふざけるなっ！ 僕はお前を一生許さないからな！」

僕はそう叫んで、角南の部屋を飛び出した。

何がいじめているつもりはなかった、だ。

何がそれが当たり前のことだと思っていた、だ。

例えばようなない怒りが全身からこみあげてくる。こんな気持ちを感じたのは初めてだ。

僕は怒りの制御の仕方がわからず、ただ地団駄を踏むだけだった。やり場のない怒りを床に八つ当たりしているといったところだ。

「慧くん？」

階段から雛子さんが顔を覗かせていた。

「地団駄を踏むのはいいんだけど、せめて靴を脱いでからにしても
らえるかしら？」

「あ……」

僕は慌ててスニーカーを脱いだ。

「すみません」

「ねえ、下りてこない？」

少しだけ怒りが静まった僕は、雛子さんの言葉に従って一階へ下
りた。

4 (2)

レクリエーションルームには、朝霞由姫と凜の姿はなかった。

「由姫と凜ならお風呂に入ってるわよ」

そう言った雛子さんは小さく微笑んだ。たぶん僕の視線が泳いでいたことを察知して、そう言ったのだろう。

僕は朝霞由姫と顔を合わせずに済んでホッとした。にしても、萬谷の言った通りにお風呂に入ったんだな。変な主従関係だ。

「今リングをむくから、適当に座ってて」

雛子さんはキッチンに向かった。

帰るなら今がチャンスかもしれないけど、おそらく萬谷がリンカーン・コンチネンタルの中で見張っているはずだから、さっきみたいに連れ戻されるのは目に見えている。

何か打開策を考えねば。

そんなことを考えているうちに、うさぎリングが乗った皿を持つ

て雛子さんがレクリエーションルームに戻ってきた。

「どうぞ」

「いただきます」

イスに腰掛けた僕は、雛子さんに勧められるがままリングを口に運ぶ。

「千依里の家庭事情は由姫から聞いたんでしょう？」

リングを噛んでいた口が止まる。

「千依里の母親は『これは愛なのよ』って口癖のように言って千依里に暴力をふるっていたの。だから、あの子は暴力をふるうことが愛情表現だっと思って思い込んで育ってしまったのね」

「だから、僕にやったことを許せって言うんですか？」

「うーん、慧くんってけっこう鈍感なのね」

雛子さんが苦笑する。やっぱりみんな角南の肩を持つんだな。

「じゃあ、今度は私の不幸話を聞いてくれる？」

僕は口の中に残っていたリングを飲み込んだ。

「私ね、病気が原因で子供が産めない体になったの。当時付き合っていた彼氏がすごく子供がほしい人でね、子供が産めない私は愛せないって言いだしたの」

雛子さんは悲観的になることもなく、淡々と語り続けた。

「何かその言い方だと子供さえ産んでくれれば誰でもいいみたいじゃない？ そう思ったら無性に腹が立ってきて、こっちからさつさと別れてやったのよ。こんな私でも好きになってくる男は星の数ほどいるのよ、幸せになつてあんたを見返してやるー、ってね。実際はいい男に巡り合えないのが現実なんだけどね」

「もしかしてグループホームをやっているのって、子供が産めないからですか？」

「慧くん、キミけっこう痛いところついてくるなあ」

「あ、すみません」

「ううん、いいのよ。それも理由の一つだから」

「一つ？」

「慧くん、知ってる？ 今日日本に親と暮らせない子供たちが何人いるか？」

「いえ、わかりません」

「児童養護施設に入所している子供だけで約三万人っていわれているわ。実際はもっと多いでしょうけど」

僕には想像できない数だった。

「私は元々児童養護施設の職員だったの。施設ではどうしても大勢の子供の面倒を見るから、なかなか一人一人に気を配ることができなくて。だから少人数で生活できるグループホームに自宅を提供しようと思ったの。自己満足かもしれないけど、自分の目が届く範囲の子供たちだけでも笑顔でいてほしいの」

そう言った雛子さんは、悲しみと喜びが混同した複雑な笑みを浮かべていた。

「由姫もね、ここに来た時は心に傷をいっぱい作ってて笑顔を取り戻すのは大変だったのよ。凜は由姫が連れてきた時にはもう自分で笑えるようになっていたわ。後は千依里だけ。あの子が笑ってくれたら、もう思い残すことはないわ」

ちよっとだけ胸が締め付けられた。

僕の母親なんかよりも雛子さんの方がよっぽど母親だった。

もし僕が角南を許して笑顔を取り戻したら、雛子さんは僕のことをほめてくれるのかな？　こんな僕でも人の役に立つことができるんだろうか。

って、僕は何を考えてるんだ。他人のことなんかどうでもいいじゃないか。

朝霞由姫に感化されすぎだ。

「お風呂、お先にいただきました」

「由姫姉、DVD見ようぜ」

朝霞由姫と凜がレクリエーションルームに入ってきた。

ひどいことを言ってしまった罪悪感から僕は咄嗟にうつむいて、朝霞由姫と目を合わせるのを避けた。しかし、朝霞由姫は気にした様子もなく、僕を横切りテレビの前に座った。せっけんのほのかな匂いが鼻孔をくすぐった。

「そうですね、今日は何を見ましょうか？」

朝霞由姫はテレブラックから数枚のDVDケースを取り出し、一枚を選ぶ。

何やらアニメのようなパッケージだけど。

「母をたずねて三千里、なんてどうでしょうか？」

母をたずねて三千里とは、出稼ぎに行ったつきり音信不通になった母親を心配した幼い主人公が、母を訪ねて旅に出るといふ物語だ。そんなお涙ちょうだい作品は、今ここで見るようなDVDじゃないだろう。もう少し空気読めよ。僕は胸中で思わず突っ込みを入れた。

「うん、いいぜ」

凜は大きなクッションを抱えてテレビの前に向かう。

「はい、慧くん」

雛子さんが、凜が持っていたものと同じクッションを僕に差し出してきた。

もしかして僕にも前に行つていっしょに見るといつつもりだろうか。

「いえ、僕は」

「遠慮しないでいいって言ったでしょ」

雛子さんはクッションを僕に押し付けると、強引にテレビの前へと引つ張った。

凜のクッションにはすでに凜と朝霞由姫がいっしょに座っていた。僕はその横にクッションを置き、腰を下ろした。体が沈んでいくこの感覚、ビーズクッションだな。

「じゃあ私も」

雛子さんは僕が座っているビーズクッションに座ってきた。僕と雛子さんは密着する形で一つのビーズクッションを共有した。

僕の左腕が雛子さんの胸に押される。困った僕は右へと体をずらすが、雛子さんの胸は逃げれば逃げるほど侵攻してきた。

仲良くアニメを觀賞している場合じゃないんだけどな。

一〇分くらい経つただろうか。

鼻をすする音が聞こえてきた。

テレビでは出稼ぎに向かう母親と主人公が決別するシーンが流れていた。第一のお涙ちょうだいシーンだ。

雛子さん、朝霞由姫、凜の三人が泣いているのは言うまでもない。みんな感情が豊かだな。どうせ最後には母親に会えるんだから、泣くことはないだろうに。

それにしても何か変な気分だな。こんな風に誰かといっしょに過
ごすなんて何年ぶりだろう。隣に人がいるというだけで、こんなに
も心が落ち着くなんて知らなかった。

心地良くて、安心する。

今まで張り続けていた虚勢が消えていくような気がした。

僕はそんな穏やかな気持ちに身を任せ始めていた。

「……くん、喜屋武くん！」

僕は朝霞由姫の呼ぶ声で目を覚ました。どうやら身を任せすぎていつの間にか熟睡してしまったようだ。こんな風に気持ち良く眠れたのは久しぶりじゃないかな。

だが、そんな穏やかな気持ちは呆気なく消失した。

「っ！」

僕は眠い目をこすりながら、眼前に広がる光景に愕然とした。睡魔も一気にどこかに逃げ去ってしまう。

「か、火事？」

炎が僕と朝霞由姫の周囲を取り囲んでいた。まさに火の海とはこういう状況をいうのだろう。

さっきみんなで食事をしたダイニングテーブルもDVDを見たテレビも、すべてが炎に飲み込まれていた。

こんなに火が広がるまで誰も気付かなかったのか？ いや、今はそんなことどうでもいい。脱出が先決だ。だけど、炎に行く手を塞がれて、脱出ルートが見つからない。どうればいいんだ？

そういえば、雛子さんと凜の姿が見当たらない。僕を置いてさっさと逃げたんだろうか。やっぱり人間いざとなると自分が一番可愛いんだ。

僕はこのままここで死んでしまうのか？

「いやだ、死にたくない！」

僕はその場に小さくうずくまった。

「いやだ、いやだ……」

死ぬのが怖くてただ叫んでいた。

「喜屋武くん、落ち着いてください。この炎は幻影です」

「こんなに熱いのに幻影なわけがないでしょう！」

「喜屋武くんが熱いと思い込んでいます。惑わされないでください」

「そんな見え透いた嘘はつかないでください！」

僕は煙で咳きこんだ。目がしみる。これが幻影なはずがない。

「僕を焼死させようとしてるんですか？　そうに決まってる！　僕が角南を許さなかったから、腹いせに僕を殺そうとしているんだ！」
「ごめんなさい！」

声と同時に、朝霞由姫の平手打ちが僕の左頬に炸裂した。

「しっかりしてください！　大丈夫ですから……私を信じてください」

朝霞由姫は震える僕の体をやさしく包み込んだ。まるで母親に抱かれている赤ん坊のような、そんな安堵感があつた。全身の力が萎えていく。

炎に包まれているというのに、不思議と熱さも煙たさも感じなくなっていた。朝霞由姫の言ったとおり、これは幻影なのだろうか？　いや、もしかしたら僕は夢を見ているのかもしれない。僕はまだビーズクッションの上で寝ているのかもしれない。

「喜屋武くん、早く千依里さんのところに行つてあげてください」

「こんな時に何を言ってるんですか？」

僕は朝霞由姫の体を突き放した。

「今起きていることは現実です」

「現実ならなおさらです」

「雛子さんと凜ちゃんが説得していますが、ダメなんです。喜屋武くんじゃないと、この炎は消せないんです」

「もうこれ以上僕を巻き込まないでください！　あなたが行けばいいじゃないですか」

幻影と言っておきながら炎を消せと言う。わけがわからない。頭の中が混乱するばかりだ。

「そうですね。私にできるならあの時そうしていたでしょう。でも私では千依里さんの心を救うことはできなかつたんです。えらそう

なことばかり言っていますが、私はみなさんの協力がないと何もできないんです」

朝霞由姫の双眸から大粒の涙がこぼれ落ちた。

胸が締め付けられる。朝霞由姫は本当に角南を救いたいと思っ
ているんだ。今ならわかる。朝霞由姫の生い立ちを知った今なら。

不幸を知っているからこそ、人は幸福であることを追い求める。
僕だって幸せになりたいんだ。

だから、こんな所で死にたくないんだ。

「誰もが幸せになる権利があるって言っていましたよね？　今でもそ
う思っているんですか？」

「はい、思ってます」

「僕にも幸せになれる権利があると？」

「もちろんです。喜屋武くんだって幸せになれるですよ」

「じゃあその手助けをしてくれますか？　約束してくれるなら、僕
行ってもいいですよ。火が消せるかどうか自信はありませんけど」

「約束します！　必ず喜屋武くんを幸せにしてみせます」

朝霞由姫は大きくうなずいた。

胸の奥が熱かった。もちろん、火事のせいではない。自分の言動
があまりにも無謀で僕らしくなくて。でも、こういう感情が僕にも
あったんだって驚嘆もしていた。

とはいうものの、幻影と言われてもいざとなると火の中に飛び込
んでいくにはかなりの勇気が必要だ。

「大丈夫です。自分を信じてください」

「信じろって言われても……」

「ごめんなさい、喜屋武くん。もう時間がないんです」

そう言って朝霞由姫は僕の背中を思いっきり突き飛ばした。

「わあああああああーっ！」

僕の雄叫びは炎の中に消えていった。

僕は脇目も振らず、角南の部屋に向かって走った。距離はたかが知れているかもしれないけど、こんなに全力で走ったのはたぶん初めてだ。

僕は角南の部屋のドアを開けた。室内は階下に比べると、火はそんなに広がっていなかった。
「っ！」

ただ中心には炎に包まれた角南を抱きしめている雛子さんがいた。僕は恐怖で足がすくんでしまい、その場にへたり込んだ。
ダメだ。やっぱり僕にはできない。

「おい、何ビビってんだよ？ これは幻影だつて由姫姉から聞いてんだろう？」

部屋の隅にいた凜が駆け寄ってきて、僕を立たせようとして強引に両手を引っ張る。

確かに凜の言ったとおりだ。炎に包まれている角南も雛子さんも火傷を負っている様子は見られない。

「喜屋武を傷つけたのも、父さんが母さんと離婚したのも、火事でみんなが死んだのも全部私のせいなんだ！ 私が悪いんだ！ だから、私は罰を受けなきゃいけないんだ！」

雛子さんに抱きしめられたまま、角南は泣き叫んでいた。それは幼い子供がいたずらをして母親に叱られて許しを乞っているようにも見えた。

もしかしたら角南の時間は小学五年生の時からずっと止まっていたんじゃないだろうか。体は大人へと成長しようとしているのに、精神だけがまだ子供のままだ。

角南はずっとずっと罪悪感に苛まれていたのかもしれない。きっと僕より辛い思いをしてきたんだろう。

そう思ったら僕の足は自然と角南に向かって歩き出していた。

「角南」

「喜屋武？」

「僕は心が広い人間じゃないからすぐに角南を許すことはできない。でも、時間をかけていけば許すことができる自信はある。だから、角南も自分を許してやればいいんじゃないか？」

今の僕にはこの言葉が精一杯だった。だけど、それは角南の心に届いたんだと思う。その証拠に檜木家を包んでいた炎が一瞬にして消えたんだから。

「千依里さん！」

朝霞由姫が部屋に入ってくるなり、角南に抱きついた。

「由姫？」

「良かったですね、千依里さん」

火が消えたことで、僕が角南を許したと確信したのだろう。

「ありがとう。由姫にも迷惑ばかりかけてごめんよ」

「いえ、私は何もしていませんから」

「そんなことない。喜屋武を連れて来てくれた」

角南は少し照れくさそうに微笑んだ。初めて見た角南の笑顔。笑うとけっこう可愛いんだな。

「慧くん、ありがとう。やっと千依里の笑顔を見ることができたわ」

雛子さんはとびっきりの笑顔を見せてくれた。僕はたいしたことしていないのに、そんなに感謝されると何だかくすぐりたくなってくる。

笑顔ってこんなにも人の心を穏やかにしてくれるものだったなんて知らなかった。

「これで安心して逝けるわ」

「雛子さん？」

雛子さんの体が色彩を失っていき、半透明になって、そして見えなくなった。

僕は何度もまばたきをして目をこすった。

雛子さんが消えた？

でも、そのことに誰も触れようとしなない。

「喜屋武、ありがとう。私もやっとみんなに会いに行く勇気が持てた」

「角南……、あのさ雛子さんが」

「私さ、喜屋武のこと大好きだったんだ。最後だからいいよな？」

角南は僕の言葉を遮ると、自分の唇を僕の唇に押し当ててきた。狼狽する僕を見て、角南は小悪魔的な笑みを浮かべたんだ。そして、雛子さん同様に色彩を失っていき、霧散した。

「角南……？」

僕は呆然と立ち尽くしていた。

これはやっぱり夢だ。じゃなきゃ、人が消えるなんて非現実的なことが起こるわけがない。

目が覚めれば、つまらない現実が待っているに違いない。

「お疲れ様でした」

朝霞由姫に声をかけられて、僕は体をビクンと震わせた。朝霞由姫も雛子さんや角南みたいに消えてしまっただろうか。

「喜屋武くんのおかげで雛子さんも千依里さんも無事旅立つことができました」

「旅、立つ？」

「一年前の今日、この家は火事に遭いました」

萬谷から聞いた、朝霞由姫以外の人間が焼死したっていう児童養護施設ってこのことだったのか。そういえば、雛子さんも朝霞由姫がここにいたことがあるって言っていたのを僕は思い出した。でも、それだと一年前の火事で雛子さんと角南は死んでいることになるじゃないか。

「火事の原因は千依里さんのタバコの火の不始末でした。深夜だったので気付くのが遅くなってしまい、雛子さんは必死でみんなを助けようとしたのですが。私だけが助けられました」

「ちよっと待ってください！ やっぱり雛子さんと角南は」

朝霞由姫は心痛な面持ちでうなずいた。

「千依里さんはみんなが死んだのは自分のせいだと言って、ここを離れようとはしませんでした。毎日毎日夜になると、自責の念にかられて泣いていました。あの炎は千依里さんの悲しみの表れだったんです」

僕は言葉を失っていた。

「生前、千依里さんは私に喜屋武くんの話をよくしてくれました。暴力をふるうことが愛情表現ではないと知った千依里さんはずっとあなたに謝りたいと言っていました。だから、喜屋武くんが千依里さんを許してあげたなら、千依里さんも自分を許すことができるのではないかと思ったんです」

つまり朝霞由姫の予想は的中して、角南は自分を許すことができ成仏したってことになる。僕はまんまと利用されたってわけだ。

あまりにも現実離れしすぎていて怒る気にもなれなかった。

「ははは……」

僕の口から乾いた笑い声がもれる。

□？

そういえば、角南は消える直前に僕にキスをした。僕はファーストキスを幽霊に捧げたということになるのか？

健全な青少年の九七パーセントは、ロマンチックなシチュエーションでファーストキスはしたいという願望があったはずだ。一応、僕だって男だ。そんなことを夢見る可愛い幼少時代だってあったんだ。だけど、もうそれは叶わぬ望みだ。

そう思ったら、何か目の前がくらくらしてきた。

もう何も考えられない。

僕は精根尽き果ててその場に倒れた。

「喜屋武くん！」

遠のく意識の中で、朝霞由姫の必死に叫ぶ声だけが聞こえてきた。

エピソード

目が覚めたら僕は布団の中にいた。見慣れぬ天井に、ここが自分の部屋でないことがわかる。

僕は枕元に置いてあったメガネをかけた。

「起きたか？」

いきなり凜が僕の顔を覗き込んできく。

「わっ！」

僕は布団の中から転げるように飛び出した。

凜はそんな僕のおまぬけな姿を見て、一瞬怪訝そうな顔をするが、すぐに大きな声を上げて笑い出した。

「お前、アタシまで幽霊かと思ってたのかよ？ バカじゃねえの。」

アタシは二ヶ月前に由姫姉にここへ連れてこられたばっかなんだよ。腹の立つ言い方だけど、凶星だけに言い返せないのが辛い。

「由姫姉、喜屋武が起きたぞー」

凜は笑いが止まらないのか、苦しそうに腹を抱えながら部屋から出て行った。

昨日とはイメージがずいぶん違って見えた。生意気な口調は相変わらずだが、刺々しさがなくなっている。

僕は室内を見回した。何もないフローリングの真ん中に僕が寝ていた布団が敷いてあるだけだった。淡いピンク色のカーテンから太陽の光が透けている。

「おはようございます。ご気分はいかがですか？」

エプロン姿の朝霞由姫が入ってきた。

「たぶん大丈夫です。あの、ここはどこですか？」

「雛子先生の家です」

「雛子さんの家は火事で燃えたんじゃないですか？」

昨夜のことはやっぱり夢だったのか？ いや、さっきの凜が言っ

た言葉が夢ではないと物語っている。

「雛子さんの遺言でしたので、お爺様をお願いして同じ造りの家を建て直したんです。今は私と萬谷さんと凜ちゃんの三人で暮らしています。本当はグループホームとして再建したかったんですけど、児童養護施設も人手不足でこちらにまで人員を割くことができないと断られました。だから、いずれは私が資格を取ってここをグループホームにするつもりです」

何も考えていないようで、ちゃんと将来のことを考えているんだな。

僕は自分の将来のことなんか考えたこともなかった。ただ毎日が無気力に生きていただけだった。僕にも自分がやりたいことが見つけられるだろうか？

「あ、そうです。これ」

朝霞由姫はエプロンのポケットから一枚の紙を取り出した。

「何ですか？」

「メンバーズカードです」

それは感動クラブの会員証だった。しかも、ラミネート加工もされていない普通の画用紙に、手書きで『会員ナンバー3 喜屋武慧』と書いてあるだけ。付け加えると、ピンクのペンで可愛く縁取りされている。

「約束ですもんね。私、喜屋武くんを必ず幸せにしてみせますから！」

昨夜の約束と僕が感動クラブのメンバーになることがどう結びつくのか理解できないけど、朝霞由姫は瞳にキラキラとお星様を浮かべていた。何だかまんまと朝霞由姫の術中に陥ったような気がする。天然キャラだと思わせておいて、実は策士だったりするのだろうか。「では、私は凜ちゃんといっしょに朝食の支度をしますから、後で下りてきてくださいね」

「朝霞先輩が作るんですか？」

「残念ながら、私は盛り付け担当です」

朝霞由姫が苦笑すると、部屋を出て行った。

僕は手のひらに残されたカードを見つめた。ナンバー3ってことは、感動クラブのメンバー数は僕を入れてたったの三人ってことだよな。まさかナンバー1と2は、朝霞由姫と凜って言うんじゃないだろうな。

「はずれだ」

「っ！」

背後からいきなり声が聞こえてきて、僕は声にならない悲鳴を上げて体を硬直させた。

「ナンバー2は凜だが、ナンバー1はオレだ」

振り向くと、萬谷がヤンキー座りでキュウリを一本口にくわえていた。いつの間に部屋に入ってきたんだろう。全然気付かなかった。いろんな意味で心臓に悪い人だ。

「憑き物が落ちたみたいな顔してんな」

「お、おかげさまで」

僕は微笑した。

「このカードはな、お嬢の友達の証なんだよ」

萬谷は右手に感動クラブのメンバーズカードを持っていた。確かに『会員ナンバー1 萬谷弾』と書いてある。

「お嬢は見てくれはいいんだが、あの性格だから友達ができねえんだよ。感動クラブっていうのは、友達を作るためのお嬢の口実なんだよ」

まあ家がヤクザだったりすると、余計に友達ができないだろうかな。

「お前、昨日から何か勘違いしてるみてえだな。お嬢はヤクザの養女じゃねえぞ」

「あ！」

萬谷が僕の心を読むことができるのをすっかり忘れていた。

「オレらのボスはお前のようなクソガキは一生会うことがかなわねえ、さる御方とだけ教えておいてやる」

それって、もしかしてヤクザなんかよりももっとやばい人ってことなのだろうか？

僕の心が読めるくせに、こういう時だけ萬谷は何も答えてくれなかった。この人、一体何者なんだろう。

「執事って言っただろう」

萬谷は毅然と答えると立ち上がり、窓を開けた。

窓から入ってくる初夏の風が、憂鬱な僕の気持ちを吹き飛ばしてくれた。

とりあえず、僕は朝霞由姫が待つ一階へと下りることにした。からっぽになったお腹と心を満たすために。

おわり

エピソード（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。
励みになりますので、感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0082i/>

感動クラブへようこそ！

2010年10月8日15時04分発行